

義務教育課だより 10月号

情報活用能力

令和元年12月に文部科学省が発表したGIGAスクール構想は、コロナ禍を契機として、加速度的に進み、児童生徒に1人1台端末が整備され、現在では日常のツールとして、端末を活用した学習活動が各学校で行われるようになりました。それとともに、学習の基盤となる資質・能力の一つである「情報活用能力」の育成も更に重要性が高まっています。

この「情報活用能力」の育成を目指し、愛媛県では、教員を対象に年2回のICT活用スキルチェック、児童生徒を対象に11月にCan-Dolistに関する調査を行っています。この県独自の調査においては、教員、児童生徒ともに「情報活用能力」が向上している結果となっています。また、文部科学省が例年実施している「学校における教育の情報化の実態等に関する調査『教員のICT活用指導力の状況』」の令和4年度の速報値が9月に公表されました。愛媛県は昨年度に続き、5項目中4項目で全国1位となりました。これらは、ICT環境の整備が各市町で進められるとともに、先生方が日頃からICTを授業等に積極的に取り入れ、真摯に授業改善や研修等に取り組んでこられた成果です。本県においては、教員も児童生徒も「情報活用能力」を育成する環境が整ってきていると考えています。

「令和4年度 学校における教育の情報化の実態等に関する調査（速報値）」

『教員のICT活用指導力の状況（小中高）』 文部科学省

	県平均値	全国平均値	全国順位
教材研究・指導の準備・評価・校務などにICTを活用する能力	98.3%	88.5%	1位
授業にICTを活用して指導する能力	96.7%	78.1%	1位
児童生徒のICT活用を指導する能力	96.9%	79.6%	1位
情報活用の基盤となる知識や態度について指導する能力	98.1%	86.9%	1位
ICT活用指導力に関する研修を受講した教員の割合	93.0%	72.8%	4位

「情報活用能力」を基礎として、「ICT活用の最適化」を図るためには、授業の中で、身に付けさせたい学力や資質・能力を向上させるためにICT活用が有効な場面を、適切に見極めて授業を構成することが必要です。第4期愛媛県学力向上推進3か年計画の目標でもある、学校教育の質の保証・向上に向けて、アナログとデジタルのベストミックスを図り、愛媛の授業を更に質の高いものにしていきましょう。

生成A I ガイドライン

「生成A I」が急速に発展、普及していく激動の時代の中で、児童生徒の学習の基盤となる「情報活用能力」にも今後一層、注視していく必要があります。

令和5年7月4日に文部科学省から「初等中等教育段階における生成A Iの利用に関する暫定的なガイドライン」が示されました。ニュースなどでよく目にする「生成A I」を皆さんは使用したことがありますか。生成A Iは「深層学習によって構築した大規模言語モデルに基づき、ある単語や文章の次に来る単語や文章を予測し、『統計的にそれらしい応答』を生成するもの」であり、それを使いこなすには、以下のような新たな認識やスキルが必要です。

- A Iに自我や人格はなく、あくまでも人間が発明した道具であることへの認識
- 回答は誤りを含むことがあるため、「参考の一つに過ぎない」ことへの認識と、最後は自分で判断する基本姿勢
- 対象分野に関する一定の知識や自分なりの問題意識とともに、真偽を判断する能力
- 指示文（プロンプト）への習熟 等

現時点では、児童生徒の利用について慎重な対応を取る必要があります。一方で、学校外で使われる可能性を踏まえて、全ての学校で一層の「情報活用能力」を育む必要もあります。

まずは教員が、個人情報やプライバシー、セキュリティ、著作権などに十分留意しつつ、活用してみてください。その上で、教員研修や生成A Iの校務での適切な活用に向けた取組を推進し、教員のA Iリテラシー向上や働き方改革につなげることが大切です。

10年後、20年後…人生100年時代を生きる子供たちは、このA Iを始めとする最新の知識技能とどのような未来を生きていくのでしょうか。今後、情報化が加速度的に進む中、生成A Iのような新しい技術や情報を受け身ではなく、主体的に選択し活用していく力が求められます。答えが一つではない問題に向き合い、多様な立場の者が協働的に議論し、納得解を生み出すなど、たくましくもしなやかに学び続ける姿勢を、教員自身も子供たちも身に付ける必要があるでしょう。子供たちが生きるこれからの社会を想像しながら、確実に必要となる「情報活用能力」を育む愛媛の教育の推進を引き続きお願いします。